

# 素敵な空間「エルドラード」にて・・・

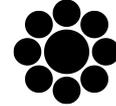


「赤の仲間入り」（右）と「ときシードル」

ときは今 あめが下しる 五月かな (明智光秀作)



土岐明智家紋



細川家紋

先日、青森県五所川原市にある「トキあつぷる社」代表である土岐彰寿（ときあきなが）氏から、同社開発のシードル「赤の仲間入り」と「ときシードル」の2本が贈られてきた。

「赤の仲間入り」は4月28日に発売されたばかりの、世界初の「赤〜いシードル」。後者の「ときシードル」は、明智光秀と土岐氏との縁にて、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」放映のタイミングに、同氏が開発したものの。

筆者の導火線に火を付けてくれたのは、後者の明智光秀が宿る「ときシードル」であった。青森と熊本とは、陸路で約1700キロ、車で約20時間ほどの位置関係にある。そこで、赤い糸を見つけてしまったのであった。

それは、細川ガラシャ（細川忠興の妻）の存在である。何と、ガラシャは明智光秀の三女。現在も、忠興とガラシャの墓が、熊本市の泰勝寺跡にあり、時折、取材で足を運び入れる処でもある。よって、1700キロの距離が一気に縮まった。

「ときシードル」のラベルを見ると、光秀の連歌として、「ときは今 あめが下しる 五月かな」とある。「とき」は土岐氏、「あめが下」は天下、「しる」を治めるという一説もあるが、どうやら、光秀の決断の言霊に胸を打たれてしまったようだ。

また、細川ガラシャの最期を迎える直前の歌に、「散りぬべき時知りてこそ 世の中の 花も花なり 人も人なり」（桜も人も散るべき時を知っているからこそ、桜であり、人というものです。これが世の習いなのです!）と。

ガラシャが壮絶な死を遂げたのは、キリシタンであったことも要因の一つだが、幽閉され死に至ったのは、明智光秀が織田信長を討ったことによる。ガラシャの死をもって、はじめてガラシャの忠誠心が明らかとなるが、こと既に遅し。

史実的には、戦国時代であるからこそ、凄まじいものではあるものの、青森の土岐明智一族と熊本の細川との繋がりに、正直なところ、鳥肌が立ってしまった。また、近しい人物に嫁いだのが細川家の末裔となれば、尚更のことである。

上記のようにあれこれ考えている内に、熊本ホテルキャッスルの会員制クラブ「エルドラード」の情景が心に浮かび上がった。土岐明智と細川の現代の接点を、同ホテルのクラブにてと思い、通い詰めた同クラブの中を拝見させて頂くことに。

同ホテルの個室に「細川」もあるが、りんご酒を置いて、その姿を楽しむには「エルドラード」しかない。勿論、同ホテル最上階に昇れば、熊本城全景が眼前に広がる絶景の地点から、城に向かってシードルをお見せすることもできたのだが・・・。

流石に、「エルドラード」の造りは筆舌に尽くし難く、入った瞬間に空気が変わる。間接照明を多く用い、壁の絵画や装飾品、更には、ゴージャスなカーサが鎮座しており、特に、グランドピアノがカウンター化したオブジェが、何ともお洒落である。



会員制クラブ エルドラード